

おらほのふぐすま

写真家 鈴木 渉

昨年一月に『おらほのふぐすま 浜通り発ときどき中通り』という写真集を本の泉社から出版しました。東日本大震災二年後の二〇一三年から一〇年間で一四五回、軽自動車で埼玉から福島に通い記録したものをまとめました。個人の作品集ではあっても、被災地の記録は資料的な価値があるとの思いでした。

なぜ福島なのか

世界中を震撼とさせた東日本大震災。その日、私は工場で働いていました。柱は揺れ、キャビネットの引き出しは次々と飛び出し、天井からつり下がった空調機器がガタガタと音を立てて揺れ今にも頭上に落ちてきそうな勢いでした。続いて起こった原発事故には、恐怖と不安で身も心も震え上がってしまった記憶があります。

り着くのは簡単ではありませんでした。また当時は燃料も簡単には補給できないという事情があり、燃費もよく小回りの利く軽自動車で取材を続けることにしたのです。震災から二年後、六〇歳で定年退職した時が取材のスタートでした。

現地の人たちのとのつながり

福島を撮影すると意気込んでみたものの、まだ震

埼玉出身の私には福島との縁は何もありません。それでも繰り返し通い続けたのは、ニュースで何度も見た大津波と原発事故に、言葉にはできないほどの衝撃を受けたからです。しかも福島で作られた電力は東京や首都圏で使われていたことを後から知りました。電気を使ったのは中央で、被害を受けたのが地方という構図にも何か割り切れない複雑な気持ちがありました。しかも、子どもたちが避難先の学校でいじめにあったり、賠償金をめぐる被災者同士の分断や、根拠のないデマに苦しめられていることに心を痛めています。埼玉に住んでいる自分にも何かできることがないだろうか、瓦礫の撤去は無理でも写真で記録することならできるとは思いません。立ち入り禁止のところや迂回せざるを得ない道路などもあり、目的地にたど

災の混乱が続いていました。渦中にある被災地に出かけて、邪魔にはしらないだろうか？ 結局、野次馬なのではないか、となかなか足を踏み出せませんでした。それで身近な祭りの撮影から始めようと思いました。祭りには人びとの絆を深める力があると思ったからです。インターネットや現地の役所、観光協会などに連絡をして情報を集めました。実際に向いて行くのと遠く埼玉から来たことに驚いている様子でしたが、すぐに打ち解けることができました。自分たちが

誇りに思っている祭りにわざわざ埼玉から出かけてきてくれたことが嬉しかったのだと思います。祭りの様子はSNSでも発信し、つながりを深めてゆきました。祭りの写真と並行して風景やイベント、取材を通じてつながりのできた人たちの写真も撮影しました。プライバシーの問題もあるので、人物を撮影するには信頼関



進水式の記念写真（新地町）



収穫の喜び（楢葉町）



子どもたち (広野町)



アクアマリンふくしまにて (いわき市)

親しみを込めて「ふぐすま」

取材を始めて一〇年以上たったので写真集にまとめることにしました。タイトルは「おらほのふぐすま 浜通り発ときどき中通り」と決めました。「ふぐすま」をめぐっては現地の人から「そんな発音はしない」「一度も聞いたことがない」という言葉も聞かれました。私としては親しみを込めたタイトルだと思ったのですが意外にも不評でした。その後、実際の写真をSNSで発信するとしだいにその明るい写真が理解されタイトルにも不満の声は聞かれなくなりいいねと言ってくれる人も出てきました。

実は「ふぐすま」には飾らない普段着の姿という意味も込めました。報道でよく使われる「フクシマ」という呼び方には、放射性物質の汚染地帯という意味で、現地の人びとは疎外感を感じているのです。「ふぐすま」こそ相應しい呼び方だと思ったのです。

係がなければできません。そのためには自分の目的を知ってもらうことが大切です。それで名刺に東北復興祈願、ふるさとの宝ものという文字を刷り込んで必ず渡すようにしました。また、私は長年工場勤めで機械相手の仕事をしてきたのでコミュニケーションが苦手でした。それで、できるだけ現地回数多く出かけて、現場に長くいること、笑顔で接することを心掛けました。そして、一番大切なのは自分の心を開くこと、相手を信頼して出会いに感謝することが大事なのだと実際の取材を通して学びました。

福島を元気づけたいというのが目的なので、最初のページは「海幸を呼ぶ」という縁起の良い見出しにしました。進水式の船を迎える釣師浜(新地町)の人たちの笑顔を載せました。ほかにも市民有志による海洋調査や魚と酒を楽しむイベント、昔から続く祭りや命の大切さ、公園の遊具で飛び跳ねる子どもたちなど希望が湧いてくる作品が載っています。

これからの取り組み

今年二月〜三月にかけてNPO法人「ストリートふくしま」の協力によって福島市の信夫山ガイドセンターで写真展も開催することが出来ました。そして私のfacebook(インターネット交流サイト)での友人が県内のあちらこちらから会場に来て、そこで私を介して新たな友達の輪が生まれました。インターネットでのつながりがリアルでも実現したのです。

震災から一三年がたち原発事故による福島の災禍は風化しつつあります。またここ数年、新型コロナウイルスのパンデミック、ウクライナ戦争、パレスチナ紛争と世界中で大規模な問題が次々と起こっています。

今年は元旦から能登半島地震がありました。もはや誰もが命の危険と隣り合わせの中で生きていることを実感する時代となってきました。暗い世相に不安を抱えて生きている人が大勢いると感じています。私はこれからも写真で記録し、福島の復興の様子を伝え希望を届けたいと思っています。



祭りの親子 (南相馬市)